

戦争が駆け足でやって来る! (その15)

「戦争法案可決」反対運動は“終わりの始まり”となるか？

9月19日安全保障関連法案が参院本会議で可決成立した。安倍は連休前に可決しなければ、反対運動がさらに盛り上がることへの危機感から強行採決した。しかし「いつでも、どこでも米国のための戦争に付き合う」集团的自衛権は憲法違反であり、権力は憲法に従う＝立憲主義を否定した今回の暴挙は政府自らが民主主義を否定したと言える。

そして安倍は「時間が過ぎれば国民の怒りは収まるだろう」と国民を舐めている。

しかし反対運動をリードしているのは、学生グループSEALDS（シールズ）や「安保関連法案に反対するママの会」など組合や政党の動員ではなく、個人が自分の意志で反対の声を上げている。それは「平和が壊され、自分や子供が戦場に駆り出される」ことへの危機感。

「子供の貧困や格差社会。若者への低賃金・長時間労働。他方では軍事予算の大幅増額と武器生産・輸出」などへの怒りの反映ともいえる。「戦争反対！憲法守れ！」は「生きさせろ！まともに暮らせる仕事と未来を！」という若者たちの切実な抗議の声だ。

私達も組合員としてだけでなく、一人の日本人として、一人の人間としての生き様が問われている。時代の傍観者でいるのか？未来への闘いに参加するのか？「戦争法案」反対運動を“終わりの始まり”とするのか？問われている。

安政法制の根拠として、周辺国の脅威が盛んに語られることにも違和感を覚える。「武力行使が身を守ると信じるのは、妄信そのもの」と確信するからだ。運営する診療所がかかって襲撃されたとき、中村さんは「死んでも撃ち返すな」と仲間に行った。報復の連鎖を断ったことが、後々まで自分や仲間、事業を守った。安全保障とは地域住民との信頼関係にほかならない。そんな思いを、近著にこう書いた。

〈利害を超え、忍耐を重ね、裏切られても裏切り返さない誠実さこそが、人々の心に触れる。それは、武力以上に強固な安全を提供してくれ、人々を動かすことができる。私達にとって平和とは理念ではなく、現実の力なのだ。私達はいとも安易に戦争と平和を語りすぎる。武力行使によって守られるものとは何か、静かに思いをいたすべきかと思われる。〉

『天、共に在り』中村哲(アフガン支援の医師)

9月20日東京新聞より

「9・23さよなら原発、さよなら戦争全国集会」に参加しよう！

主催「さよなら原発」1000万人アクション 13時30分から代々木公園B地区にて開催